



アブラハム契約、ダビデ契約 聖書のストーリーの基本型

アブラハム



- 創12:アブラム、カナンの地へ カナンに行け。大いなる国民、大いなる名、祝福の基となる
- 創15:アブラムとの契約 足跡継ぎが生まれる。四百年のちカナンの地を与える。裂かれた動物の間を燃える松明が通り過ぎる。
- 創17:契約のしるし 99才、アブラハムと呼ぶ。神となり、民となる。永遠の契約のしるしとして割礼を施せ。
- 創18:アブラハムの執り成し 正義と公正を行い主の道を守らせるために選んだ。「正者を悪者とともに滅ぼされるのですか?」

ヤコブ

- ヤコブの最後
- 創49:ヤコブの祝福 12息子たちへ



モーセ

- 出15:モーセの歌 出エジプト
- 出19-20:シナイ山で十戒
- 出33-34:主の名による官言 シナイ山で二度目の十戒
- モーセの墓屋



- モーセの最後
- 申31:ヨシュアを任命
- 申32:モーセの歌 証書
- 申33:モーセの祝福 12部族へ



ヨシュア

- ヨ1:後継者ヨシュア
- 相続地分割完了@シロ
- ヨ22:東の3部族への祝福
- ヨシュアの最後@シェケム
- ヨ23-24:ヨシュアの最後のことば



@約束の地

サム上2:ハンナの歌

サムエルの最後
サム上12:サムエルの最後のことば

ダビデ

歴上16:契約の箱が安置
歴上17:ダビデの契約



サム下6:ダビデの墓屋
サム下7:ダビデの契約



歴上21:ダビデの人口調査
歴上22:ソロモンへ契約を相続

歴上28-29:ソロモンに王位継承

ダビデの最後
サム下22:ダビデの悲いの歌 詩18:
サム下23:ダビデの最後のことば
サム下24:ダビデの人口調査



ソロモン

歴下1:ソロモンの知恵
歴下5-6:契約の箱の安置と祈り
歴下7:ソロモンへの約束 詩篇第2巻
歴下9:シェバの女王

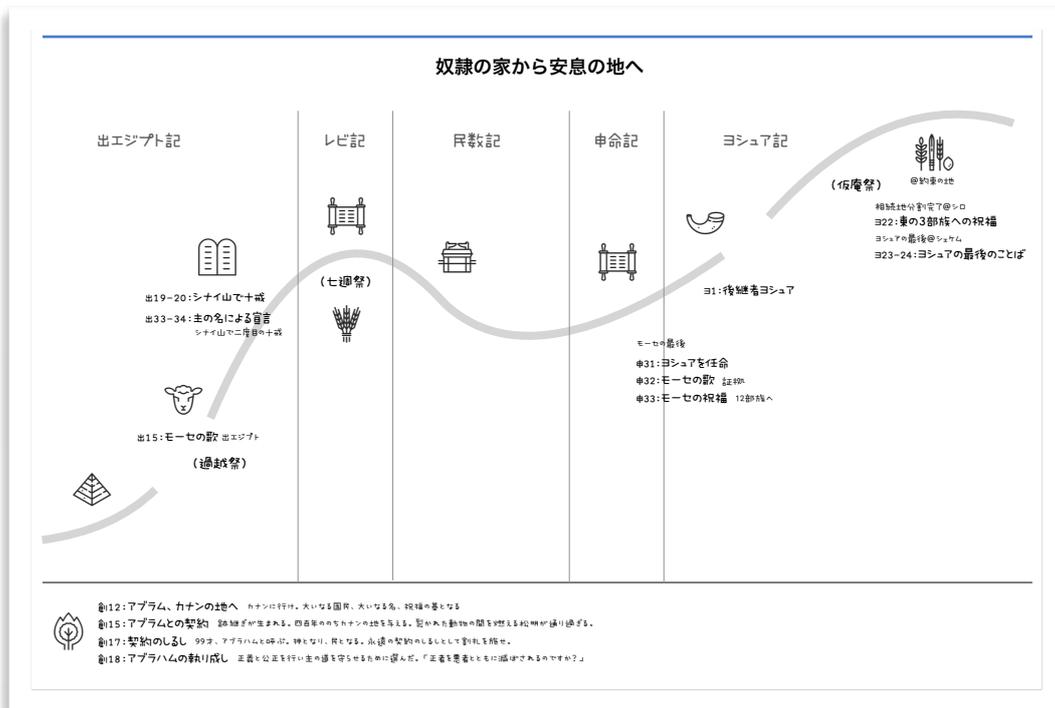
列上2:ソロモンへの遺言
列上3:ソロモンの知恵
列上8:神殿奉獻の祈り
列上9:ソロモンへの約束
列上10:シェバの女王
列上11:ソロモンの背信



@エルサレム神殿

「アブラハムの契約とダビデの契約の流れ」を見ていました。アブラハムから始まって、モーセ、そして、ヨシュアへ。ハンナから始まって、ダビデ、ソロモンへという流れです。契約の言葉や歌、いろいろなところに大切な歌があります。そして、最後の相続の言葉というようなものを通して、この流れを追って行きました。この表を見ると2つの流れがあるのですが、これは似ているものですよという意味で、2つの流れが書いてあります。

モーセがエジプトから連れ出して幕屋を建て、それで荒野を歩いて、最後にモーセが死ぬ時に、次のヨシュアを任命して、歌を相続し、ヨシュアが約束の地に導くという流れが、ハンナの歌から始まります。ダビデが幕屋をまた出る。古い天幕、シロにあったヨセフのエフライムの天幕が捨てられて、ペリシテから連れ出されて幕屋を作る。それで、ダビデの人生が進んでいき、ダビデが死ぬ前に詩篇18篇の救いの歌が書かれていたりしますね。それで、ダビデからソロモンに相続される。約束が相続される。それで、ソロモンはその約束に従って神殿を建てましたという、この2つの流れが似ているものですということを書きました。



これが「奴隷の家から連れ出して安息の地へ」ということですので、モーセのところからヨシュアのところまで。これは横の形になっていますね。もうひとつの「ダビデからソロモンへ」という方は、ここハンナから始まるエルサレムの神殿まで、この流れが書かれています。2つを見ると、似ているものだということが分かるように書いてあります。

この流れとしては、奴隷の家から連れ出されて、安息の地へということなんですが、ここ(2箇所)に断絶がありますよね。大きな戦いがあるって、連れ出されて律法が与えられる。それで、契約の箱が中心になって導かれて、最後に申命記の歌が相続され、ヨシュアが戦ってヨルダン川を渡って、約束の地に入るといことですね。

この流れは、アブラハムの契約とダビデの契約が成就する新約聖書の主イエスキリストが来て、新しい天と地を作るというストーリーも同じ流れですよということを見るのがこの表(「福音書から黙示録へ」)です。十字架と復活と言っているところは、過ぎ越しの祭りの話です。大宣教命令が与えられ、御霊が与えられます。これは五旬節、7週の祭りの時です。手紙によって御言葉によって導かれて、最後の戦いがある、新しい天と地、新しいエルサレムが建てられるということです。この中にも、歌や特別な教え、預言の言葉、最後の晩餐の教えなどがあります。使徒行伝の中には証言という形で歴史が語られるところがあります。異邦人向けの手紙とユダヤ人向けの手紙という形で、手紙が構成されて、新しい神様の民が作られるという黙示録。黙示録全体が歌ですけど、その中にも、特に新しい歌とか、神のしもべモーセの歌と子羊の歌という言い方とか、アーメン・ハレルヤという歌詞が出てきますね。それで完成していく。この最後の戦いがここにもありますね。黙示録の最後の戦いの歌や言葉が書いてあります。その最後の戦いというのは、新しい天と地の始まりです。新しい創造ということですね。下の所にはこの4つの福音書の役割というのが書いてあります。

聖書のストーリーの基本型							
種が実を結ぶ成長の旅							
記念：イスラエル三大祭	逾越祭 1月	七週祭 3月			仮庵祭 7月		
							
エジプトから約束の地へ	出エジプト	律法授受	荒野		約束の地		
ヨセフ天幕からソロモン神殿へ	出ベリシテ	ダビデの天幕	ダビデ王の戦い		ソロモンの神殿		
復活から新天新地へ	復活	聖霊降臨	聖徒の戦い		新天新地		
テーマ：御国の勝利	脱出	恵み	戦い		平和		
王のストーリー：	父が誓って、子を連れ出す(子とされる)	父が子に宝を与える(相続の最上部分 戦いの武器・神糧)	子が戦って、民を導き入れる(最後は決戦)		民がすべてを相続する(約束のもの)		
民のストーリー：	善とされる(信仰によって)	聖とされる(善を知る)	善であることが試される(信仰が試される)		聖であることが明らかにされる(善が満ちる)		
参考：キム・パドソン著『フィルムアート社刊「新しい主人のための祈り」』p.56	関門	原動力	求める道徳	舞台設定	転機	ゴール	
	英雄：ヒーロー 神話	自分の外側 自己犠牲(自己保身) 恐れなき覚悟	善気、確さ、たくましさ	見知らぬ異国 安全と平和	同志	何かをする：他者のために善気を出して、困難に打ち勝つ(集団的視点)	死、臆病
	処女：ヴァージン おとぎ話	自分の内側 自己愛護(自己喪失) 善の愛護	想像力、精神性	富庶を中心とした王国 混乱と変化	友人	何かになる：本当の自分になって喜びを知る(個人的視点)	狂気、失望、自殺

この3つの表をまとめたらこのような形「聖書のストーリーの基本型」になりました。エジプトから出て、約束の地へ。奴隷の家から連れ出されて自由になると。ヨセフの天幕ではなくて、ダビデの天幕が選ばれて、ソロモンが神殿を建てるところ。復活から新天新地の創造へ。こういう並行がありますね。これはどういう形なのかということなのですが、種が実を結ぶ成長の旅なのですね。救いのストーリー。神の御国の勝利のストーリーにパターンがあります。パターンがあるのかということなんですけど、イスラエルの三大祭りがそのパターンを表していますから、パターンを覚えなさいと神様が言っているようなものですね。過ぎ越しの祭り、7週の祭り、仮庵の祭り。復活祭とペンテコステみたいなものですね。この記念の祭りを中心に見ると、同じ再創造のストーリー、新しい創造のストーリーだということが分かります。それぞれの段階で何が取り扱われているのかを見ると、テーマが御国の勝利ですから、「最初に脱出、恵みが与えられて、戦いがある、平和・シャロームへ」というこのテーマを、頭(か

しら)と体。「頭(かしら)側」、王様のストーリー、リーダー側のストーリーとして見る時と、同じストーリーを「民側」、体側のストーリーとして見る時と、見る方向が2つありますよね。この2つのものをどういうストーリーになっているのかということのを両側から見ます。

王のストーリーという方は頭側ですね。父が戦って子連れ出す、子とされる。そして、子なので宝が与えられる。相続の一番大切な部分、戦いの武器、特権が与えられる。その与えられた子が、戦って民を導き入れる。そして最後に決戦があります。その戦いに勝利をおさめるので、民はすべてのものを相続する。約束されたものを相続する。

民側から見ると、民は連れ出されるといところは、義とされる、子とされるということ。義とされる。信仰によって義とされるということですね。正しい者とされる。正しい者なので、聖であると宣言される。愛を知る。義であることが、正しい者とされましたから、正しい者であるということが試される。信仰が試される。これは荒野の時代。その信仰の戦いに勝利をおさめると聖であるということが明らかにされ、愛が満ちる。これはまるで1日目から6日目まであって、7日目が聖である、完成の部分ということですから、「義、聖、義、聖」という民側がどうなっているのか、どう変化しているのか、その旅によって、その最初の種はどのような実を結ぶのかということが分かるかと思えますね。

聖書ではないストーリーでも、旅のストーリーは似ているパターンがあるわけです。皆そのパターンに慣れているというのか、その流れを期待しているというのか、小説であったり、映画であったり、ゲームもそうですね、そういうストーリーがあるものというものは似ているパターンがあるわけです。そのパターンを研究する人たちというのを見て、聖書外で言うと神話学、物語学、心理学の中にもそういうものがあります。キム・ハドソンという人が書いた本の表現の仕方、パターンの見方は面白いなと思います。神話学で言うと、英雄物語、英雄物語のパターン、ヒーローのストーリーというパターンを教えてくれるのが普通なのですが、この人はバージンのストーリーということで、ヒーローのストーリーと対になっている女性的なものですね。男性的なストーリーと女性的なストーリー、その女性的なストーリーもパターンとして教えてくれて分析しています。

ヒーローのストーリーという方は自分の外側ですね。自分の中の問題ではなくて、外の問題に対して、自己犠牲によって戦っていくと。恐ろしい恐怖を克服する勇気、強さ、たくましさがないと、そのストーリーが進んでいかない。ストーリーが進んでいく時の原動力ですね。舞台は、見知らぬ異国で、安全と平和が欲しいというものです。脇役は同志で、何かをするのです。他者のために勇気を出して困難に打ち勝つ。これがヒーローがやってくれることですね。失敗すると、死とか、臆病になる。ヒーローに対してヒロインではなくてバージンとキム・ハドソンが言っていますけれども、面白いと思いますね。自分の内側の問題というのがバージンのストーリーの方です。典型的なのはおとぎ話というのはそういうものですね。シンデレラとか。自己実現、喜びの実現がストーリーを動かしているものということ。家庭を中心とした王国の中の混乱とか、変化というのが舞台設定になるようです。脇役に友人が出てきますね。目的、行き着くところは、この本当の自分になって喜びを知るのが最終的なゴール。失望とか自殺がそれに対するもの。キチガイになるとかいうのがその逆みたいなものですね。ですから、ヒーローの方は自分のためというより、何か自分の属しているグループの代表として戦って、そのグループを導き入れるという意味で、集団的なゴールなのです。バージンの方は自分側ですね、体側なんですけど、自分がどうなるかと、何かになる、

何かをする。何かになるという意味で、個人的な視点という風に書いてあります。こういう区分を見て、確かににこういうヒーローのストーリーとか、おとぎ話には確かにパターンがあるということを見て、聖書のストーリーを見てみると、王側のストーリーというのは英雄物語。民側のストーリーというのは処女の物語ということです。その観点で見ると、なるほどそういう側面があるねということが見えますので、この脚本を書く技術の本みたいなもの、映画の脚本とか、小説の脚本とか、そういうものを書く時に、自分で完全にオリジナルで想像することは皆さんはできませんので、いろいろなパターン、いろんな登場人物のパターンを見て、自分のストーリーに味を付けたり流れを決めたりするようです。その脚本の書き方を教えてくれる本です。新しい主人公の作り方というタイトルになっていますけど、そのそういう側面は、この聖書のストーリーも、ストーリーですから、旅ですので、似ている面があります。そういう観点でそれぞれの出来事を見てみるというのは役に立つと思います。

本来は逆なのです。神様の聖書のストーリー、歴史のストーリーにそのパターンがあるので、それを人々は真似て自分たちのストーリーを作っているということです。こちら(物語のパターン)が先でこの聖書のストーリーがあるのではなくて、神様のストーリーが表現されている。人間は神様の似ているものなので、似ているようにストーリーを考えてしまうということだと思います。クリスチャンではない、信じてない人達が書いている分析だから役に立たないというものではないということです。気をつけて使わなければいけないとは思いますが、こういう見方が役に立つということだと思います。